

小松市埋蔵文化財調査だより

第1号 1991.3.31

小松市教育委員会 〒923 石川県小松市小馬出町91番地
埋蔵文化財調査室 TEL (0761) 22-4111



木場遺跡B地区1号製鉄炉跡（竪型炉）

発刊のあいさつ

小松市教育委員会
教育長 木下健次

小松市内では、現在約300ヶ所にのぼる遺跡が確認されており、このなかには、全国的にも数少ない重要な資料となる遺跡も多く、小松市の原始・古代の歴史を語る貴重な財産となっております。一方、近年の開発の増大には、目ざましいものがあり、当然、地下に埋もれていた遺跡は、その開発の波にさらされることになる場合が多くなってきております。遺跡が破壊されるまえに、せめて記録によって保存しようとするのが発掘調査であります。その調査件数や面積は、年々増加の一途をたどり、貴重な発見もあいついであります。また、最近のゴルフ場等の大規模開発では、知られていなかった新たな遺跡が次々と発見されています。ところが、発掘調査で得られた重要な成果や、貴重な発見について、市民の方々にお伝えする機会も少なく、また、博物館での資料公開にいたるには、膨大な出土品の整理作業をかかえて、遅々として進まない現状にあります。そこで今回、市民のみなさんに、一年間の調査成果を簡単にまとめてお伝えする、「小松市埋蔵文化財調査だより」を発行することにいたしました。本紙を通して、市内の遺跡調査の現状を知り、さらに、遺跡の重要性やその保存に少しでも関心を深めていただければ幸いに存じます。

平成2年度の小松市内埋蔵文化財発掘調査

木場遺跡の調査

所在地 小松市木場町・長谷町地内

調査期間 平成2年4月16日

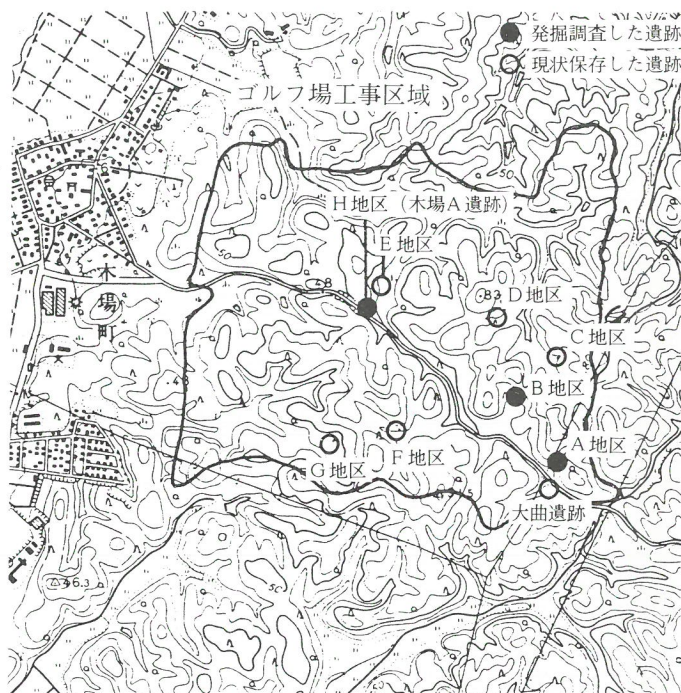
～平成3年3月28日

原因 ゴルフ場建設（小松カントリーゴルフクラブ）

調査の経緯 小松市木場町周辺の丘陵地において計画された小松カントリーゴルフクラブ建設に先立って、平成元年度、小松市教育委員会は埋蔵文化財詳細分布調査を実施しました。その結果、これまで確認されていた木場A遺跡と大曲遺跡に加えて、7カ所の区域（A～G区）で、製鉄関連遺跡が発見されました。この結果をもとに、開発事業者と現状のまま保存できないか、協議を行ったところ、C～G区と大曲遺跡は現状のまま保存することとなり、これ以外のA・B区と木場A遺跡（H地区）は現状保存不可能という回答であったため、平成2年度発掘調査を行うこととなりました。

木場遺跡の概要 木場遺跡とは木場潟の東側に位置する丘陵地に分布する木場町地内の製鉄関連遺跡を総称して付けた名称で、周知の木場A遺跡や大曲遺跡もこれに含まれます。この製鉄遺跡は木場潟の南に位置する林町・戸津町・二ッ梨町周辺の丘陵地から木場潟の北東側に位置する蓮代寺町周辺まで連なって群在しており、木場遺跡も、広義ではこの大製鉄遺跡群の中の一支部として位置付けられるものです。発見された遺跡の内容は、鉄を原料の砂鉄から作る溶鉱炉の働きをもつ「製鉄炉跡」と原料の砂鉄を溶かす燃料として使われた木炭を製作した「炭窯跡」が主で、各遺跡とも、製鉄炉跡1～2基、炭窯跡2～3基で構成されるようです。遺跡の時代は主に奈良・平安時代と思われます。

A地区の調査 当地区は木場遺跡の南端に位置し、木場遺跡の中央を通る主谷の北側、周知の大曲遺跡の谷を挟んだ向かい側の丘陵斜面に立地しています。発見された遺構は地下式の窖窯構造をもつ炭窯跡2基と平窯構造の炭窯跡1基で、製鉄炉跡



木場遺跡位置図（S=1/25,000）

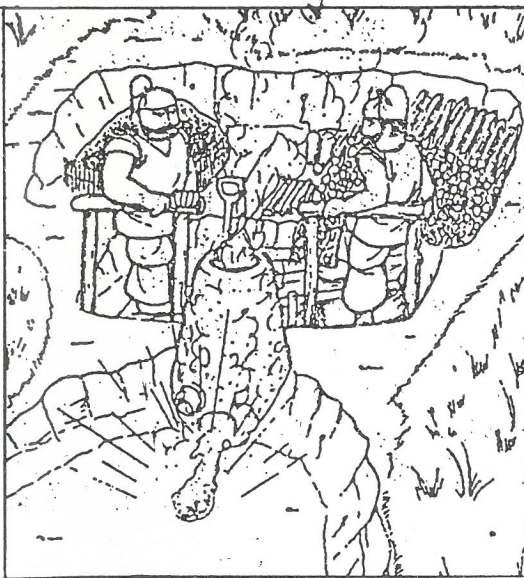
は発見されませんでした。しかし、炭窯の灰層や窯の内部からは鉄滓が出土しており、製鉄に関連して築かれたものと考えられ、大曲遺跡に存在する製鉄炉（竪型炉？）の燃料である木炭製作として築かれたと判断されます。ここから出土した遺物は土師器1点であるため、時代を確定できませ



A地区2号炭窯跡（全長6m、幅1.6m）

んが、平安時代頃と思われます。

B地区の調査 当地区はA地区の北西側、中央の主谷から支谷に入り込んだ南側に面する斜面に立地しています。発見された遺構は製鉄炉跡2基と炭窯跡2基で、1号製鉄炉は炉の上方にフイゴ座が設置される円筒状の炉体をもつ竪型炉構造をもつと思われます。炉の構築は幅2.5m、長さ3m、深さ60~70cmに斜面をカットし、奥壁中央に幅70cm、奥行き100cmの炉体を構築しています。炉体は手前に袖石を置き、粘土を張り付けて作られており、その上方には2.8×1.5mのフイゴ座が設けられています。これに対し、2号製鉄炉は炉体が残っておらず、下部構造と思われる125×250cmの隅丸長方形の土坑のみ発見されました。この土坑内には炭化材が敷き詰められており、一見長方形の箱型炉構造と思われますが、フイゴが炉の上方に設けられており、出土する鉄滓の種類から考えて、1号製鉄炉と同様竪型炉の構造をもつと思われます。しかし、同じ竪型炉と言っても2号製鉄炉は下部構造をもつ点で、箱型炉に似ており、両者の折衷形態と呼べるものかも知れません。炭窯はA地区で検出された炭窯同様地下式の窖窯構造をもつものです。時代は1号製鉄炉跡と2号炭窯跡から10世紀前後の須恵器が出土しており、2号製鉄炉跡が1号製鉄炉跡より先行するとしても、9~10世紀のものと判断されます。



「相馬地方の遺跡と開発」より転載

製鉄炉（竪型炉）操業想像図



B地区2号製鉄炉跡（手前は炉外流出滓）

H地区（木場A遺跡）の調査 当地区は木場遺跡の西端に位置し、中央主谷の北側斜面に立地しています。発見された遺構は製鉄炉跡1基と炭窯跡2基で、製鉄炉跡は長方形に掘り込んだ土坑の上に炉を構築する箱型炉構造をもつと考えられます。炭窯跡の2基は重複しており、A窯を廃棄した後その穴を利用してB窯が構築されています。A窯は側壁に横口（灰のかき出し口）を4ヵ所もつ横口式炭窯で、全長5m、幅1.5mを測り、横口の開けられた部分には排水溝の巡る4×2.5mの平坦なテラスが設けられています。A窯廃棄後、横口を石積みで塞ぎ、奥壁をさらに3m拡張して、全長8mの窖窯構造のB窯を再構築しています。時代はA窯から8世紀後半の須恵器が、B窯から9世紀頃の土師器が出土しており、1号製鉄炉跡もこの頃のものと考えられます。



H地区（木場A遺跡）全景

林遺跡の調査

所在地 小松市林町ルの部ほか

調査期間 平成2年4月3日～7月9日

調査の概要 本遺跡の調査は、南部会館建設事業に先立つ緊急発掘調査です。

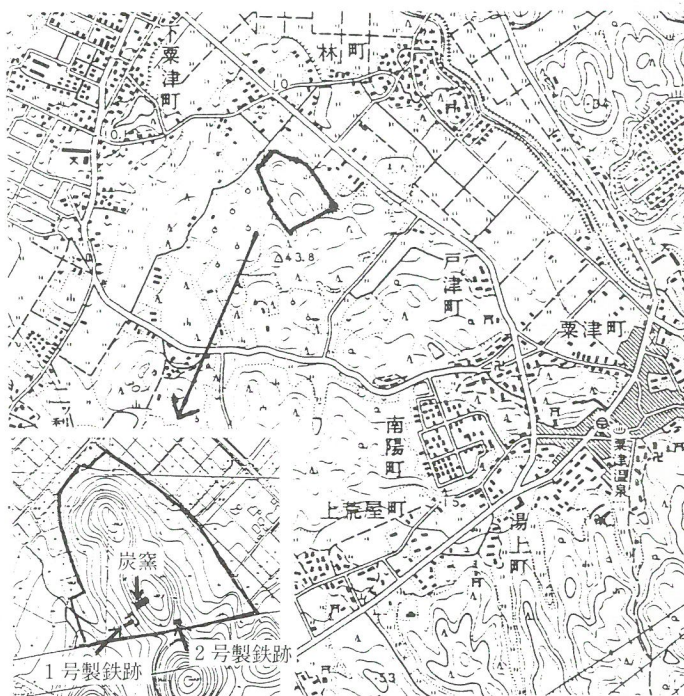
昭和63年11月より12月にかけて詳細分布調査を行い、全体の約半分の調査を終了した時点で、以前より判明していたものも含め三ヶ所で須恵器窯跡の存在が確認され、更に製鉄跡が一ヶ所発見されました。

平成元年5月より残りの部分の詳細分布調査を行い、新たに製鉄跡が発見されたので、8月よりこの発掘調査を開始しました。

尚、本遺跡は、遺跡地図・台帳では須恵器窯跡の林1～7号窯跡となっていました。須恵器窯跡の他に製鉄跡も発見されたため、林遺跡と総称しました。8月より発掘調査を行なった製鉄跡は1号製鉄跡です。また、隣接した小松バイパス建設に伴う発掘調査では2基の須恵器窯跡を調査していますが、これに林窯跡の名称を付しています。

1号製鉄跡は、箱型の形態（箱型炉）をしていて、砂鉄を溶かして鉄塊を取り出す製錬炉（溶鋳炉）です。箱型炉は、壁等の炉体を壊して鉄塊を取り出すため、殆ど残っていない場合が多く、本跡も炉床の一部しか残っていなかった。しかし、その下に、製鉄炉に伴う土坑（掘り方）が見つかりました。上端で幅1.9m、長さ4.8m、下端（底）で幅1.5m、長さ4.2mの大きさでありました。深さは山側で60cm、谷側で20cmでありました。壁及び床面の一部は焼けていて、埋まっていた土には、炭が多量に含まれていました。製鉄炉とりわけ箱型炉は、湿気をきらうため地面に大きな穴を掘り、これを空焚きし、さらに土と木炭を交互につめて埋め、上面に炉本体を築いたものと考えられています。

また、この製鉄炉は、斜面を約1.2m カットして谷側に土を盛り、幅約6m、長さ約7mの平坦面を造成して構築されていて、山側には排水溝が掘られています。更に、この土坑の周囲には長軸に平行して左右に2個ずつと短軸の山側に1個の柱穴があり、この製鉄炉には上屋があったと考えら



林遺跡 位置図 1/25,000 左は 1/10,000



1号製鉄跡全景（下部掘り方）上方より

れます。

この1号製鉄跡は、山側の排水溝の中から須恵器の坏が出土していて、それによれば8世紀の中ごろに操業していたと考えられます。

1号窯は炭窯跡で、1号製鉄跡（炉）で使われた炭を焼いた窯であります。1号製鉄跡の斜面左上方に発見されたもので、全長8.7m、幅は奥壁から中央部分で1.7m、焚口部分で0.9mを測ります。奥壁より1.8mの地点1.9m左にはりだす形で煙だし（煙道）が設けられていました。煙道の下底の直径は1.0mを測り、それからややすぼまりながら地表に出ていたと考えられます。

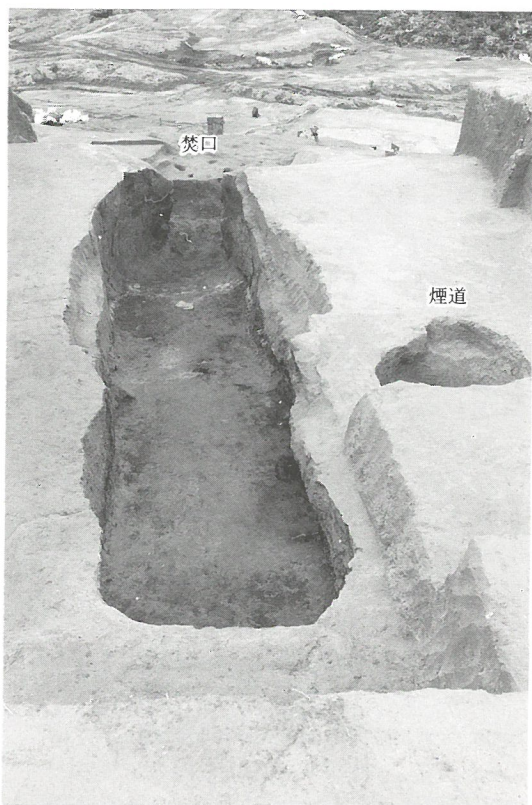
2号製鉄跡は、小松バイパス建設予定地との境



2号製鉄跡 鍋鑄型 (外型)

に発見されたもので、バイパス建設にかかる一部分は県当局により調査されました。ここでは、堅型の製鉄炉1基と、鍋の鋳型が出土しました。この堅型炉は半分しか掘り上がっていませんが、上部にフィゴを設置した痕跡がみつかりました。鍋の鋳型は、地中に据え付けられていて、約50cmの直径です。これは、鋳型の外型であり、この内側にも型を置き、間に溶かした鉄を流し込むものです。現に、斜面の下方よりその内型等の鋳型の部品が発見されています。

この2号製鉄跡は、出土した土器から、10世紀代に操業していたと考えられます。



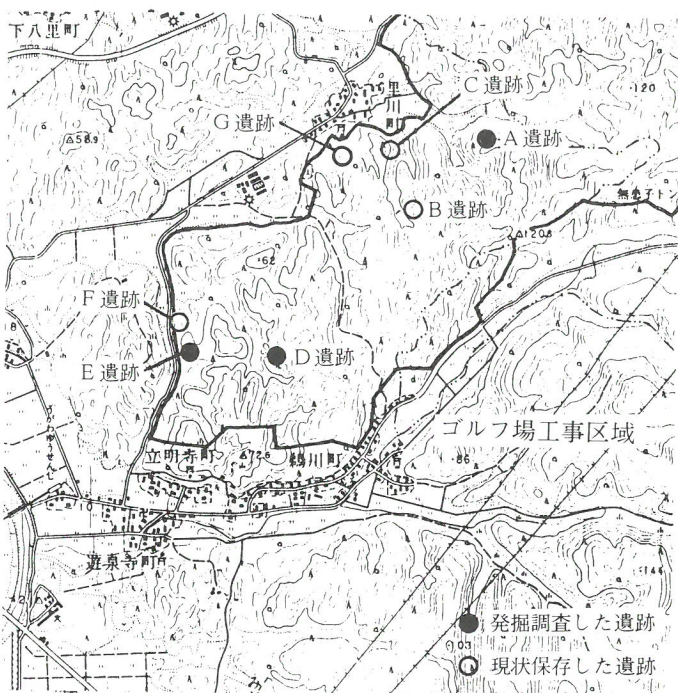
1号窯跡（炭窯）全景 右に煙道 上方より

里川遺跡群の調査

所在地	小松市里川町地内
調査期間	平成2年5月21日 ～平成3年6月(予定)
原因	ゴルフ場建設 (GOLFCLUB ツインフィールズ)

調査の経緯 小松市東部北辺にあたる里川町と鶴川町・立明寺町とははさまれた丘陵地で、ゴルフ場が建設されることになりました。開発区域は辰口町にもまたがって、面積 230ヘクタールと広大なものです。この区域には、周知の遺跡は存在していませんでしたが、遺跡の有無を全く確認していない区域でもあったわけです。そこで平成元年度に詳細な遺跡分布調査を実施しました。

分布調査の結果、七ヶ所の新たな遺跡が発見され、それらは、里川遺跡群と総



里川遺跡群位置図 (S=1/25,000)

称し、個々に、里川A～G遺跡の名称をつけました。A～C遺跡は炭窯跡群、D遺跡は縄文時代遺跡、E～G遺跡は平安時代の遺跡です。これらの遺跡の保存について開発側と協議した結果、B・C・F・G遺跡を現状で保存するが、A・D・E遺跡は、発掘調査による記録保存もやむを得ないということになりました。

このため、平成2年度事業として発掘調査をA・D・Eの順で実施することとして、5月21日より調査を開始しました。

里川A遺跡の調査 本遺跡は炭焼きの窯跡群で、時代は中世以降と考えられますが、詳しくはわかっていません。

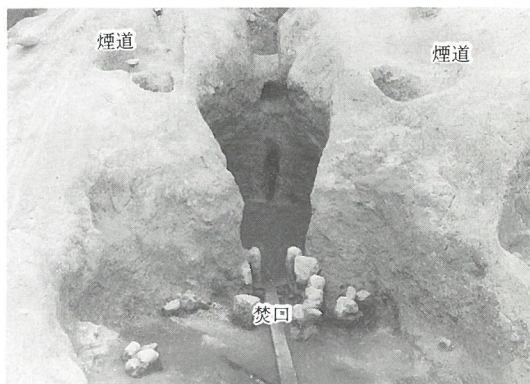
立地は、里川町の集落から東方に伸びる大きな谷を丘陵内奥部へ深く進んだところに、通称「観音山」と呼ばれるひととき高い標高100mを超える険しい地形の尾根があり、その頂上に近い北向き斜面にあります。約4,000㎡を調査しました。

炭窯は、尾根斜面を刻む谷地形のところを特に選んで築いており、本遺跡では5本の谷筋に沿った互つの群に分けられる分布となっています。

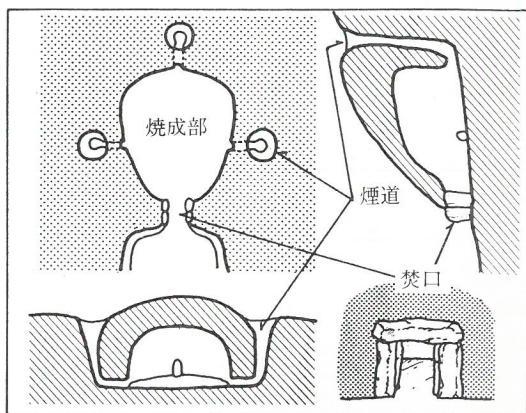
炭窯の形は二種類確認されています。一つは、斜面に横穴を掘って焼成部とする地下式の構造をとるもの、もう一つは、地面に深さ30cmほどの穴を掘りくぼめて焼成部の窯床をつくり、その上に粘土で、ドーム状に天井部を造り上げる半地下式構造のものです。前者は2基、後者は20基近く確認しています。

地下式のものは、その製作に多くの労力を必要としますが、落盤さえしなければ、何度でも炭を焼くことができます。この構造のⅡ区2号窯は、幅2m、長さ3mで、奥にやや広い卵形の平面形をしており、床は奥に高くゆるやかに傾斜しています。床に堆積した炭の層から、6～7回にわたって炭が焼かれたことがわかります。左右両壁と奥壁の3ヶ所で、床面に接する部分から横に掘り込み、L字に立ち上がって地上に抜ける煙出しの穴がみられます。焚口は、幅40cmで高さも40cm（推定）程の四角い窓のようなもので、両側には柱状の石が立てられていました。

半地下式のものは、掘りくぼめた穴（土坑）に木材をつめて、それを焼く毎に土でおおって天井部とし、焼き上がると天井部を壊して炭を取り出すものです。従って、一つの土坑でせいぜい1～3回の生産で、必要に応じた簡便な炭の生産法で



里川A遺跡Ⅱ区2号窯



里川A遺跡Ⅱ区2号窯復元模式図



里川A遺跡Ⅳ区1号窯

あったといえます。この構造のⅣ区1号窯は、幅1.4m、長さ6mの長方形で、深さは30cmを測ります。本窯は、この構造のものの中では最も焼成の回数が多く、床面に3回分の焼かれた層が確認されました。長軸上の両端には、煙出しのための丸い穴が掘られています。

里川D遺跡の調査 本遺跡は縄文時代中期の遺跡で、今から約5千年前にあたります。

立地は、埴田・里川から立明寺方面に伸びる広い谷の入り口付近から東方向に別れて丘陵内部に入る、通称「滝ヶ谷」と呼ばれる谷の最奥部の東側丘陵尾根上の平坦面にあります。通称「滝」と称する湧水地の上方にあたっています。

調査面積は400mと小規模で、幅80cm、長さ2m、深さ10～15cmの穴が1基検出されたのほかは、土器片と石器が少量分布している程度でした。恐らくは、一定期間居住した跡ではなくて、狩猟などのために移動している途中のキャンプ地的なものであったと考えられます。

里川E遺跡の調査 本遺跡は、10世紀の前半(平安時代)の土器の出土がみられた遺跡です。

立地は、立明寺方面に伸びる広い谷筋の中程から、東方に入り込む通称「後ろ谷」の入り口部北側の丘陵上で、その頂部に近い南西向き斜面にあります。本遺跡の当初調査予定面積は、この斜面中腹の狭い平坦面約200mで、非常に小規模な遺跡を想定していました。しかし、調査が進むにつれ、大量の土砂が遺跡内に流れ込んで、地形が大きく変化していたことが判明しました。平坦面は予想以上に広く、斜面を四角く切り崩し、谷を埋めて作り出した人工の平坦面であったことがわかりました。

平坦面のほぼ中央部では、一辺50cmほどの平たい凝灰岩がいくつか並んで出土しており、これは建物の基礎石、つまり、礎石建物が存在しているものと考えられます。こういった礎石をもつ建物は、通常の集落の建物とは異なり、寺院としての可能性が大きいと考えられます。

この調査は、予想を大きく上回る規模となったため、平成2年度中に完了する予定を変更し、平成3年度に継続して調査することになりました。

以上、すべて新発見の遺跡であったわけですが、特に、調査継続中である里川E遺跡は、伝承等の記録は一切なく、その内容からいって、極めて重要な発見となるものと考えられます。



里川D遺跡全景（小松市街・日本海が臨める）



里川E遺跡調査中全景



里川E遺跡土器出土状態

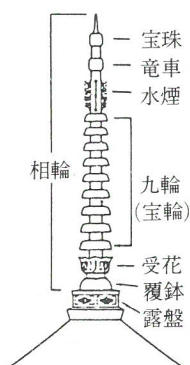
小松の重要遺跡・遺物 ①

陶製水煙（とうせいすいえん）

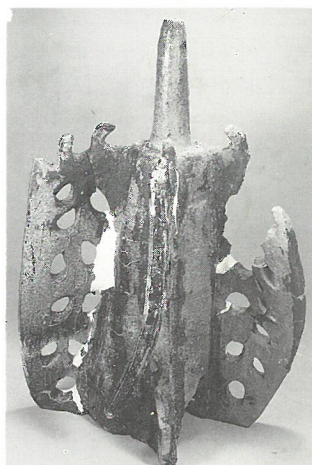
戸津町の通称「六字ヶ丘」と呼ばれる丘陵部一帯にひろがる戸津古窯跡群は、古代から中世にいたる窯跡の密集地で、特に、奈良・平安時代を中心とする須恵器や土師器の窯跡を60基以上確認しており、全国的にも注目されている遺跡です。

昭和57年に調査した戸津31号窯は、9世紀代（平安時代中頃）の須恵器生産の登窯で、その焚口部から特異な大型の遺物が検出されました。それは明らかに、寺院の五重塔などの頂部に装飾的に立てられる相輪の部品と考えられるものでした。

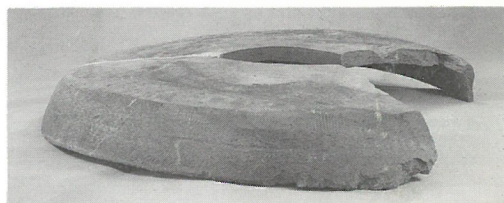
水煙は、高さ約70cm、幅約50cmを測り、透かし穴をもつ四枚の羽根は、燃え盛る炎を表現しています。水煙の下部に連ねられる宝輪も出土しており、最大で直径約64cm、高さ10cmを測って、中央に心柱を通す穴のあいた三度笠のような形をしています。ともに重量感があり、実際に、塔の頂部で組み合わせられれば、高さ4m近い規模になります。通常、寺院の木造塔では、相輪は金銅製であり、陶製のものは、全国的にも報告例はありません。水煙は、市の指定文化財となっています。



相輪模式図



水煙



宝輪

平成2年度 埋蔵文化財調査事業一覧

発掘調査	遺跡名	所在地	調査期間	原因	時代等	面積㎡
	林遺跡	林町	4月3日～7月9日	南部会館建設(市)	奈良～平安	2,500
	木場遺跡	木場町他	4月16日～3月30日	ゴルフ場建設(民)	奈良～平安	2,500
	里川遺跡群	里川町	5月21日～調査中	ゴルフ場建設(民)	縄文・平安・近世	5,000
	滝ヶ原A遺跡	滝ヶ原町	11月8日～11月19日	ゴルフ場建設(民)	不詳	200
分布調査	開発行為名称	所在地	開発面積	調査期間	備考	
	ゴルフ場建設(民)	滝ヶ原町他	174ha	7月10日～11月19日	滝ヶ原A～D遺跡を確認	
	ゴルフ練習場建設(民)	今江町	34,647㎡	9月13日	遺跡確認されず	
	果樹園整備(民)	戸津町	8,000㎡	11月27日～12月6日	遺跡確認されず	
	土砂採取(民)	八幡町	925㎡	8月10日	遺跡確認されず	
	レストラン建設(民)	御館町	2,001㎡	5月17日	銭畑遺跡との重複を確認	
	社屋建設(民)	御館町	2,191㎡	5月17日	銭畑遺跡との重複を確認	
	駐車場整備(民)	有明町	24,557㎡	9月14日	遺跡確認されず	
	土地改良総合整備(国)	下栗津町	11.4ha	5月23日	遺跡確認されず	
	土地改良総合整備(国)	上り江町	3.8ha	6月2日	遺跡確認されず	
	土地改良総合整備(国)	若杉町他	7.0ha	6月2日	遺跡確認されず	
	道路改良工事(市)	下八里町	1,500㎡	5月9日～5月12日	下八里B地下式墳群を確認	
	道路改良工事(市)	若杉町	3,328㎡	10月2日	遺跡確認されず	
	道路改良工事(市)	月津町	1,464㎡	6月13日	念仏林南遺跡との重複を確認	
	小学校プール建設(市)	蛭川町	1,843㎡	10月20日	松梨遺跡との重複を確認	
	体育館用地造成(市)	河田町	4,443㎡	11月6日	遺跡確認されず	
	体育館建設(市)	中海町	2,782㎡	3月2日	遺跡確認されず	
	中学校増築(市)	小野町	252㎡	11月17日	遺跡確認されず	

(民)は民営事業、(国)は団体営事業、(市)は市営事業を示す。